ルカ文書の演示的スタイル*

山田　耕太

1．はじめに

筆者は既に、ルカ文書のジャンルが歴史文学であり、その歴史叙述は西洋古典の修辞学（レトリック）の影響を受けた「修辞学的歴史」であることを拙論「使徒行伝のジャンル」で論じた[1]。また、ルカ福音書の序文がルカ文書全体の序文であり、その中でルカ文書の著者がこのような修辞学的歴史叙述を意図していることが読み取れることを「ルカ福音書の序文と歴史叙述」で論じ、序文に関する問題において修辞学的歴史の議論を補った[2]。さらに、「ルカ文書の物語的統一性」において、ルカ福音書と使徒言行録が同時に構想されたものであり、ルカ文書には、語義的レヴェルから始め全体のモティーフや構造のレヴェルに至るまで文学的ないしは物語的統一性が見られることを論じた[3]。

本稿では、序文の問題に続いて、ルカ文書の演説部分を除いた主に物語部分の叙述のスタイルに西洋古典の修辞学の影響が見られること、とりわけ演示弁論の影響が見られることを指摘することになる。すなわち、既に「使徒行伝のジャンル」の中で、使徒言行録の宣教演説が修辞学の議会弁論の一種であり、パウロの弁明演説が法廷弁論の一種であることを指摘した後、その物語部分の叙述には演示弁論の影響が見られることを以下のように指摘した。

> さらに、キケロによれば、修辞学的歴史は人の徳が称賛され、不徳が非難される顕徳的演説の一種である（『雄弁家』37，65—66，207）。使徒行伝でも、奇跡物語や回心物語を通して、ペテロ、ピリポ、パウロや回心した人々が称えられ、聖霊を通してこれらの人々に働きかけた神が崇められるが、悔い改めないユダヤ人が責められるのである（参照、13:46，18:6，28:28）。また、懲罰物語を通して、アナニヤとサッピラ、魔術師シモン、ヘロデ王、魔術師エルマ、スケワの七人の息子たちも責められる。こうして、敬虔（eusebeia）は称えられ、不敬虔（asebeia）は責められるのである[4]。

本稿では、以上のような視点をさらに徹底して深め、演示弁論の中でも顕徳（的）演説と密接に係わる葬礼演説の分析を通して、ルカ文書のスタイルを解明し、演示弁論の影響が使徒言行録ばかりでなく、ルカ文書全体に夥しく見られることを指摘することになる。

2．演示弁論と修辞学的歴史の叙述スタイル

（1）修辞学ハンド・ブックに見られる演示弁論

アリストテレスの『弁論術』（Ῥητορική）、またそれに続くヘレニズム・ローマ期の修辞学のハンド・ブックによれば、弁論は三種類に分けられていた。すなわち、法廷弁論（δικανικόν, iudiciale）、議会弁論または審議弁論（συμβουλευτικόν, deliberativum）、演示弁論または演説的弁論（ἐπιδεικτικόν, demonstrativum）の三つである[5]。アリストテレスによれば、法廷弁論は主に過去のことに関して、「正」（δίκαιον）と「不正」（ἄδικον）の問題を「告訴し」たり（κατηγορεῖν）、「弁護し」たり（ἀπολογεῖσθαι）して、裁判官や陪審員を説得する弁論である。議会弁論は主に将来のことに関して、議会や民会で「利益」（συμφέρον）になることを「奨励し」たり（προτρέπειν）、「損害」（βελτιον）になることを「制止し」たりする（ἀποτρέπειν）弁論である。演示弁論は主に現在のことに関して、祭りや葬儀などの際に、集まった聴衆に対して「美」（καλόν）すなわち「徳」（ἀρετή）を「称賛し」（ἐπαινεῖν）、「醜」（αἶσχρον）すなわち「悪徳」（κακία）を「非難する」（ψέγειν）弁論である[6]。他方、キケロは演示弁論の目的は「名誉」（honestas）であるとも言う[7]。

それらの中でも、法廷弁論と議会弁論以外の領域に亘る演示弁論は多様で幅広いが、アリストテレスは『弁論術』第Ⅰ巻第9章の中で、称賛すべき対象として、人間や神ばかりでなく、無生物や動物にも及ぶと言う。また、称賛すべき「徳」（ἀρετή）として、「正義」（δικαιοσύνη）「勇気」（ἀνδρεία）「節制」（σωφροσύνη）「気前のよさ」（ἐλευθοριότης）「度量の大きいこと」（μεγαλοψυχία）「豪奢」（μεγαλοπρέπεια）「思慮深さ」（φρόνησις）を挙げている。また、それらの反対である「不正」（ἀδικία）「臆病」（δειλία）「放埒」（ἀκολασία）「けち」（ἀνελευθερία）「度量の小さいこと」（μικροψυχία）「狭量」（μικροπρέπεια）を非難すべき「悪徳」（κακία）として挙げている[8]。

ヘレニズム期を経てローマ期に入ると、ポリスで古代民主主義社会が崩壊したことと関連して、法廷弁論が主流となり、議会弁論や演示弁論

の機会が少なくなったと思われる。中世までキケロに帰されてきたコルニフィキウス著『ヘレニウス宛弁論術』では、演示弁論については、議会弁論と同様に簡潔に触れられているのみである。演示弁論の基本的な考えはアリストテレスと同じであるが、称賛すべき「徳」と非難すべき「悪徳」の範囲はかなり広まっている。すなわち、徳目の領域が、まず外的なものと身体的なものと性格的なものの三つに分けられている。外的なものとは、機会や運によってたまたま備わった好ましい状況のことであり、「生まれ」(genos, *εὐγένεια*)「教育」(educatio, *παιδεία*)「富」(divitiae, *πλοῦτος*)「社会的力」(potestates, *δύναμεις*)「名誉」(gloriae, *εὐδοξία*)「市民権」(civitas, *πατρίς*)「友情」(amicitiae, *φίλοι*)等が称賛すべきものとして挙げられ、これらとは反対のものは非難すべきものである。身体的なものとは、生まれながら身体に備わったもので、称賛すべきものとして「活発さ」(velocitas, *ποδώκεια*)「体力」(vires, *ἰσχύς*)「美しさ」(dignitas, *κάλλος*)「健康」(valetudo, *ὑγίεια*)が挙げられ、これらと反対のものは非難されるものである。性格的なものとは判断や思想に関わるものであり、称賛すべきものとして「思慮深さ」(prudentia, *φρόνησις*)「正義」(iustia, *δικαιοσύνη*)「勇気」(fortitudo, *ἀνδρεία*)「節制」(modestia, *σωφροσύνη*) が挙げられ、これらと反対のものは非難される[9]。アリストテレスの徳目と比較すると外的なものと身体的なものが付け加わっており、最後の性格的なものは、アリストテレスの挙げている徳目の方が詳しいが、「思慮深さ」「正義」「勇気」「節制」という重要な徳目は一致する。これらの四つの徳目はギリシア悲劇にも通じる極めてギリシア的な徳目である[10]。キケロも演示弁論について言及することは法廷弁論に比べてまれであり、しかも付け足し程度である[11]。クインティリアーヌスにおいても法廷弁論が支配的であり、演示弁論に関してはあまり言及していなが、演示弁論について言及している箇所において、神々、人間、都市・建物・場所等の称賛と非難について述べているが、基本的な考え方はアリストテレスを継承した『ヘレニウス宛弁論術』と同じである[12]。

（2）演示弁論の典型としての葬礼演説

このような演示弁論は元来、「祭典演説」(*πανεγυρικός*)「顕徳演説」(*ἐγκώμιον*)「葬礼演説」ないしは「追悼演説」(*ἐπιτάφιος*) で構成されていた[13]。演示弁論はヘレニズム・ローマ期に入るとその取り扱う領域においても多岐に亘っていったが、形式においても内容においてもかなり

伝統的なスタイルが確立していたのは葬礼演説である。今日まで残されている葬礼演説はわずか6例である[14]。すなわち、トゥーキュディデースの『戦記』に収められたペリクレスの葬礼演説、リュシアスの葬礼演説、プラトンの対話篇『メネクセノス』の収められ、その中でペリクレスの妻アスパシアから学んだというソクラテスの葬礼演説、デモステネースの葬礼演説、ハリカルナッソスのディオニュシオスが引用したものをシリアヌスが書き残したゴルギアスの葬礼演説の断片、19世紀半ばに発見されたパピルスに書き残されたヒュペリデースの葬礼演説の断片である。

その最初の代表的な例は、トゥーキュディデースの『戦記』第2巻35—46章に記された、ペロポネソス戦争で犠牲になったアテナイ人を讃えるペリクレスの葬礼演説である。葬礼演説では、導入の後に（そこでは葬礼演説を述べるのに言葉が不充分であることが、しばしば言及されるのであるが）、最初に死者への讃辞の言葉を述べ、次に悲嘆の言葉を述べ、最後に残された人への慰めの言葉を述べる形式になっていたが、ペリクレスの葬礼演説の大部分は讃辞の言葉に割かれている。しかもそのかなりの部分は（36—41章）、アテナイを築いた先祖（πατρές）を記憶して（μιμνησκέσθαι）、讃辞の言葉に割かれている。また、その中では先祖によって築かれた自由と平等が支配し、法の下にある民主主義の理念が他の模範となることが述べられ、さらにそこに住む人々の徳が讃えられ、こうしてポリスへの讃辞の言葉が続く。そして、「かれらは公けの理想のために己が生命をささげて、己が名には不朽の称賛を克ちえるのみか、衆目にしるき墓地に骨をうずめた。」とポリスの理想のために亡くなった戦士への勇気（ἀνδρεία）が讃えられ（42—43章）、最後に、残された家族への慰めの言葉が述べられ（44—45章）、葬礼演説は締め括られる（46章）[15]。

もう一つの代表的な例は、リュシアスの葬礼演説である。リュシアスも導入の後に、祖先（πατρές）を想起して（μιμνησκέσθαι）、先祖を讃える（ὑμνεῖν）言葉をかなり長く続ける（2—53節）。しかし、トゥーキューディデースのペリクレス演説と違って、アマゾネスの神話時代から説き起こされて語られるのであるが、その中でアテナイを侵略してきたそれぞれの時代の敵の悪徳（κακίαι）がアテナイの先祖の徳（ἀρεταί）と対比的に語られる。それらは「愚かさ」（ἄνοια）「不正」（ἀδικία）「不敬虔」（ἀσέβεια）「不信」（ἀπιστία）「高慢」（ὕβρις）「嫉妬」（ζῆλος）「妬み」（φθόνος）などである。さらに、このような悪徳を「懲罰する」

（κολάζειν）という非難の言葉さえも見られるのである。そして、同時代に亡くなった戦士達が古えの先祖の徳にならって（μιμεῖσθαι）生き、新しい危機の中で「奴隷として生きるよりもむしろ自由のために死を選んだ」と讃えられる（54—68節）。最後に、短く嘆きの言葉（69—76節）と慰めの言葉（77—81節）が語られる。リュシアスは演説の冒頭で、この葬礼演説の目的は死んだ人々の行いによって生きている人々を教育する（παιδεύειν）ことにある、とを明確に述べている。すなわち、葬礼演説の語られるトポスは、先祖を想起してその徳を讃え、また敵の悪徳を非難して、先祖に倣った人々の徳を讃え、残された人々を嘆きと慰めの言葉で励まし、彼らに亡くなった人々の徳に倣うように勧めることにある[16]。

ソクラテスの葬礼演説も[17]、デモステネースの葬礼演説も[18]、アテナイの起源から説き起こし先祖の徳を称賛し敵の悪徳を非難し、戦争で亡くなった人々の勇気を称える、という内容に大差はない

（3）演示弁論と修辞学的歴史の叙述スタイル

以上のような葬礼演説に典型的に見られる演示弁論は、修辞学的歴史の叙述スタイルにも影響を与えていたと思われる。キケロは『雄弁家』37節で歴史叙述は演示弁論の一種であると分類し、修辞学的歴史叙述の支持者であることを明確に述べていたが、友人の歴史家ルッケイウスに宛てた手紙の中で、自分の事蹟を挿入して歴史を書くことについて注文をつけ、通常の歴史叙述の法則を無視してでも自分の行為を称賛して書いてくれるように以下のように記している。

> そこで私はあなたに度々率直にお願いしている。あなたが感じるよりも暖かく、そして歴史の法則を無視しても、私の行為を称賛してくれるように、と[19]。

ハリカルナッソスのディオニュシオスも、ヘロドトス、トューキュディデース、テオポンポスの歴史叙述について述べた『ポンペイウス宛書簡』の中で、イソクラテスの影響を最も受けた歴史家テオポンポスの歴史叙述について以下のように述べている。

> 著作のこれら全てのことは真似するのに値する。また、著作の全体に散りばめれれた正義（δικαιοσύνη）や敬虔（εὐσέβεια）やその他の多くの徳（ἀρεταί）について要所要所で考えさせ、それらと関連した状況を美しい言葉で述べることも同じく真似するのに値する[20]。

このように述べた後で、さらにテオポンポスは歴史が「明らかな徳（ἀρετή）と隠された悪徳（κακία）の全ての神秘を明らかにする」とも述べている。

同じように、修辞学の影響を受けた歴史叙述方法を語るルキアノスも、歴史家は彫刻家のようであるべきだと述べて歴史作品の序文の問題を取り扱った後に、歴史叙述の方法に関して具体的に以下のように記している。

> 序文の後で、それは取り扱う事柄（παράδειγμα）によって長くもなったり短くもなったりもするものだが、叙述（διήγησις）への移行は、円滑にかつ容易になすべきである。というのは、歴史の作品の残りすべては、長い叙述だからである。こうして叙述に徳（ἀρεταί）をうまく配列させて（κατακοσμεῖσθαι）、滑らかにかつ平らにし、そして一貫させて、でこぼこをなくすべきである[21]。

ハリカルナッソスのディオニュシオスが述べているテオポンポスの歴史にしろ、キケロが依頼したルッケイウスの歴史にしろ、ルキアノスが言及している歴史にしろ、そのほとんどは、わずかな断片や引用を除いて残念ながら失われてしまい、現存していない。しかし、ヘレニズム・ローマ期の歴史叙述の中には、このような修辞学的歴史叙述の具体例が見られる[22]。ハリカルナッソスのディオニュシオスの『ローマ古代誌』もそうであろうし[22]、キケロは修辞学的歴史の叙述理論をもっていたが、それはサルスト、リヴィウス、タキトゥスというローマ期の代表的な歴史家にも影響を与えていた[24]。ルカ文書もそのような例の一つであると思われるが、以下では葬礼演説の称賛や非難の言葉に見られる動詞、形容詞、名詞的表現を参考にして、ルカ文書の称賛と非難のモティーフを分析して見たい。

3．ルカ文書における修辞学的歴史の叙述スタイル

（1）誕生物語に見られる称賛と非難のモティーフ

演示弁論の中心をなす称賛と非難のモティーフは、ルカ福音書の誕生物語の中に典型的に見られる。その詳細については別の機会に譲ることにして、ここではその要点だけを概略的に述べてみたい。誕生物語では、まず最初にザカリアとエリサベトという神の前に「正しい」（δικαίοι）敬虔な老夫婦が登場する。これと対象的にヨセフとマリアという若い婚約中の男女が登場し、一方ザカリアは神の使ガブリエルの言葉を受け入

れることができず、神の懲罰を受けて言葉が話せなくなる。他方、マリアは信じがたい天使の言葉を聞いて「お言葉通りになりますように」と言ってそれを受け入れ、聖霊に満たされた（1:41）エリサベトの讃辞によって称賛される（1:42, εὐλογεῖν; 1:45 μακαρία）。すなわち、ここには敬虔のモティーフとともに、神の言葉を拒む者への非難と受け入れるものへの称賛という、ルカ文書全体の通奏低音となっている「信」（πίστις）と「不信」（ἀπιστία）のモティーフが叙述されるのである。さらに、洗礼者ヨハネとイエスという二人の奇跡的な誕生のエピソードの直前に、マリアの讃歌マグニフィカートとザカリアの讃歌ベネディクトスがキアスム的に交差して配列されている。これらの２つの讃歌はともに誕生物語の核をなすものであり、また後者は聖霊に満たされたザカリアが預言する、という形式で書かれ（1:67）、両者ともルカ文書全体を支配するモティーフが盛り込まれている。しかし、その讃歌自体が称賛の言葉から始まり（1:46b, μεγαλυνεῖν, ἀγαλλιᾶν; 1:68, εὐλογητός）、その内容は称賛と非難を中心とする演示弁論の影響を受けている。また、それは旧約聖書（七十人訳聖書）のトポスと表現を巧みに用いて詩的に表現される。

マリアの讃歌は、まず最初に神への賛辞の言葉から始まる（1:46b—47）。次に、神がマリアのような低い立場（ἡ ταπείνωσις）の者を顧みて下さったからである、とその理由が述べられ、今後いつの時代もマリアを讃えるであろう（μακαρίζειν）、という称賛の言葉が語られる(1:48)。また、神と聖霊がマリアに大きなことをして下さったからである、というもう一つの理由が述べられ、その哀れみは神を恐れる者に時代を越えて及ぶ、という称賛の言葉が続けられる（1:49—50）。このように謙遜と敬虔の徳を讃えた後で、イエスの将来を預言する部分に移り、高い立場の力ある者（κράτος）と高慢な者（ὑπερήφανοι）に対する非難の言葉が語られる（1:51）。さらに力ある者と低い者、飢えている者と富んでいる者の立場が将来逆転することが語られるが、そこには謙遜と貧しさという清貧のモティーフによる称賛と非難の言葉が交錯している(1:52—53)。最後に、先祖（πατρές）と想起（μμνησκέσθαι）に関する言葉で結ばれるが（1:54—55）、そこでは先祖の徳を想起するのではなく、神が哀れみを思い出すのであり、また先祖の徳に倣った今は亡き人々を讃えるのではなく、先祖と同じように神の哀れみが今に及ぶことを讃えるのである。

ザカリアの讃歌も、先に述べたように神を讃える言葉から始まる（1:

68a)。その動機は古えの預言者達が預言したように神が民を訪れて救いの業を成し遂げて下さったからである、と述べられる（1:68b—70)。その救いとは敵の手から解放されることであり、敵とは我々を憎む人々すべてであり、そこから解き放たれたことを讃える。その中で先祖（πατρές）と想起（μμνησκέσθαι）に関連する言葉が出てくるが、ここにおいても先祖の徳を想起し、それに倣って亡くなった人々の徳を讃えるのではなく、神自身が聖なる契約を想起し、先祖とともに我々にも哀れみを与えて下さったことを讃えるのである。そして、その目的は敬虔（ὁσιότης）と正義（δικαιοσύνη）をもって神を礼拝することである、と述べられる（1:71—75)。そして、最後に主の道を備え、罪の赦しによって救いに到らせる知識を与える洗礼者ヨハネの生涯とその使命を述べる言葉で結ばれる（1:76—79)。

また、イエスの誕生のエピソードには天使の短い讃歌グロリア・インエクセルシス・デオが置かれ、ここでも神に対する称賛の言葉が述べられる（2:14，δόξα，cf.2:13，αἰνεῖν)。そして、マリアはこれらの言葉を心に収め、羊飼いらは神を讃えつつ（2:20，δοξάζειν，αἰνεῖν）見聞きしたことを語り伝える。宮詣でのエピソードでも、シメオンとハンナという敬虔な老預言者の男女が描写される（2:25，δίκαιος καὶ εὐλαβής，2:37)。シメオンは讃歌ヌンク・ディミッティスで、神を讃えつつ（2:28，εὐλογεῖν)、お言葉に従って平安にこの世を去ることができる、と神を讃えるが、そこには神の言葉への恭順という「信」のモティーフも見られる。また、その直後にシメオンは敬虔なマリアとヨセフをも讃え(2:34，εὐλογεῖν)、イエスが民の支持をも反対をも受ける運命であることを預言する。アンナも幼子イエスと出会って神を讃えて（2:38，ἀνθομολογεῖσθαι)、救いを待ち望んでいた人々に語り伝える。

以上のように誕生物語は、神への讃辞と敬虔な人々を称賛するモティーフで満ち溢れている。誕生物語はルカ文書全体に展開していく様々なモティーフが、マリアの讃歌やシメオンの讃歌を始め、叙述部分や天使の言葉や預言者の言葉などに収められているが、さらにルカ文書全体を通して見られる称賛と非難のモティーフを概略的に指摘してみたい。

（2）ルカ文書全体を貫く称賛と非難のモティーフ

最近の福音書に対する物語批評の視点を取り入れると、福音書の主要な登場人物は主人公イエスと対立する反主人公の宗教的権力者、さらにはイエスの周辺にいる弟子達や、その外側に位置づけられる民ないしは

群衆、という4つのグループに分けられる。そして福音書はイエスと宗教的権力者、さらには弟子達や民ないしは群衆をも含めた人々の間の対立と葛藤、その頂点と解決に至る物語であることになる[25]。またこのような視点に立つと、ルカ文書もその基本的な枠組みは、以上のように要約できるマルコ福音書の物語構造を取り入れて、それを使徒時代にまで広げ、それらを歴史叙述のスタイルで2巻に纏めたものと考えられる。すなわち、第一巻のルカ福音書の主人公イエスに対して、使徒言行録の前半（1—12章）ではペトロが、後半（13—28章）ではパウロが、イエスの働きを継承する主人公の役割を果たす。また、主人公ペトロやパウロと宗教的権力者との対立や葛藤も基本的には第一巻と同じであり、第二巻ではそれに福音を拒んだユダヤ人も加担する。弟子達も（それに第二巻では使徒達や兄弟達という言葉も加わるが）、民ないし群衆も（それに第二巻ではユダヤ人や異邦人という言葉も加わるが）、主人公を見捨てるというモティーフを除けば、その役割は基本的には変わらない。さて、このような視点を用いると、ルカ文書全体の称賛と非難のモティーフは、一般的に言って、マリアの讃歌やザカリアの讃歌にも示されているように、主人公の側に称賛の言葉が見られ、反対に敵である反主人公の側に非難の言葉が見られる傾向があることを始めに指摘しておきたい。

（i）ルカ福音書に見られる称賛と非難のモティーフ

①第1巻の主人公であるイエスは、洗礼・誘惑の後に聖霊に満たされて（4:1, *πλήρης πνεύματος ἁγίου*）ガリラヤに帰り、ナザレでの説教の直前にイエスの宣教全体を纏めて叙述する中で、イエスのうわさが周辺に広まっていたことを述べた後に、「会堂でしばしば教え、すべての人々によって讃えられていた」と要約される（4:15, *δοξαζέσθαι*）。また、それに続く宣教開始の説教で、イエスがイザヤ書61章1節以下を朗読して「今日この聖書の言葉が成就した」と宣言すると、ナザレの会堂にいたすべての人々がイエスを称賛し（4:22, *μαρτυρεῖν*）、その恵みの言葉に驚かされるが、イエスがエリヤやエリシャの故事を引いてユダヤ人を暗に非難すると、すべての人々はイエスとは対照的に怒りに満たされる（4:28, *πιμπλάναι θυμοῦ*）。このように、イエスとイエスの教えに対する称賛が描かれ、またそれを拒んだ人々が怒りという非難すべき悪徳によって対照的に描写される。さらに、ナザレから追放される描写には、イエスの教えを拒んだ人々に阻まれて、逆に宣教が展開する、というルカ文書全体に見られる基本的な構図が既にここから始まる。

②次に、カファルナウムでの悪霊祓い、ペトロの姑の癒し、奇跡的な漁の後のペテロの召命、重い皮膚病の人の癒し、と民や群衆に対する奇跡物語あるいは奇跡的なエピソードが連続する一段落の最後に、中風の人の癒しの物語が語られる。その中で、イエスは人々の信仰を見て、病気を癒そうとするが、ファリサイ派の人々や律法学者はそれを阻んで、イエスは「神への汚しごとを言う」(5:21, *βλεσφεμία*)、と非難する。それに対してイエスは罪を赦す権威をもっていることを示すために、中風の人を癒す奇跡を行う。そして、病気を癒された人は神を讃えて(5:25, *δοξάζειν τὸν θεόν*) 家に帰る。このようにマルコ福音書の記事に従って叙述された後に、さらに26節で、そこにいたすべての人々が驚愕の念に打たれて (*ἔκστασις λαμβάνειν*) 神を讃え、畏れに満たされ (*πιμπλάναι φόβου*)、「今日、驚くべき出来事 (*παράδοξα*) を見た」という称賛の言葉が付け加えられる。すなわち、イエスの奇跡は神を汚すのではなく、むしろ神を讃える称賛すべきことが強調される。また、癒された人が神を称賛するモティーフから、それを阻む人々とは対照的に、それを受け入れる人々が畏れるモティーフへの移行が示される。

③その後に、レビの召命、断食問答、安息日の麦穂摘み、安息日の片手の萎えた人の癒しと論争物語が続くが、それらの最後に、律法学者やファリサイ派の人々は、愚かさに満たされて (6:11, *πιμπλάναι ἀνοίας*) イエスをどうにかしようと話合う。イエスを訴えようとする (6:7, *κατηγορεῖν*) 宗教的権力者は、思慮深さというギリシア的な徳とは正反対の愚かさという非難すべき悪徳によって叙述される。

④これらの論争物語の後に、野の説教が弟子達に向けて語られる。その冒頭で、貧しい人々、飢えている人々、泣いている人々へは幸いであり (*μακάριοι*)、富んでいる人々、飽き足りている人々、笑っている人々は災いである (*οὐαί*)、と語られるが、それぞれの言葉には称賛と非難のニュアンスが込められている。すなわち、マリアの讃歌と同じように、貧しく、飢え、泣いている民や群衆に代表される「低いもの」に対する称賛と、富み、飽き足り、笑っている宗教的権力者に代表される「力あるもの」に対する非難である。

⑤さらに、言葉を信じる百人隊長の僕の癒しの物語の後で、ナインのやもめの息子の蘇生物語が叙述される。イエスは葬列の中で一人息子を失って泣いている母の姿に心動かされて若者を甦らせるが、そこにいたすべての人々は畏れの念に打たれて (7:16, *φόβος λαμβάνειν*) 神を讃え、「大預言者が甦った」とイエスを称賛する言葉を述べる。すなわち、こ

こでは若者の甦りと大預言者の甦りが二重に懸けて用いられ、古へに大預言者が活躍していた「神の訪れの時」が復活したことを称賛する(7:16, ἐπισκεπτέσθαι, cf.Lk.1:68,78; Acts 15:14: Lk.19:44, ἐπισκοπή)。

⑥それに続く洗礼者ヨハネの使者による問いに対して答える中で、イエスは神の国に入る人について称賛し、「女から生まれた者の中でヨハネよりも偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さい者も、彼よりも偉大である」(7:28)と語る。それはアリストテレスが増大誇張と呼ぶ方法を用いて称賛の効果を高めているのである。また、「民と徴税人たちはヨハネの洗礼を受けて神の正しいことを認め、ファリサイ派の人々や律法学者は洗礼を受けずに神の御旨を拒んだ」(7:29−30) と述べ、神を「義とする」(δικαιοῦν) という徳について言及し、洗礼者ヨハネの悔い改めの洗礼を受けて神の御旨に従った人々に対した称賛し、反対にそれを拒んで自分を義とする人々を非難する。

⑦サマリア旅行部分に入ると、70人の弟子派遣の後で、イエス自身も聖霊によって悦び溢れて (10:21, ἀγαλλιᾶν), 神を讃え (10:21, ἐξομολογεῖν)、神の国をこの世の賢者や知者に隠し、小さき者に現して下さったことを讃える。すなわち、ここでも「力ある者」と「低いもの」とを逆転させる神が讃えられる。そして、今見ていることを見ることのできる目は幸いである (10:23, μακαρίοι) と語られ、イエスとともにおり、またそれを認めることができる人々への称賛の言葉が述べられる。反対に、それを認めることのできない人々への非難が、別の箇所で述べられる (Acts 28:26−27)。

⑧真の幸いの場面では、イエスを生んだマリアは幸いであると声を挙げる女性に対して、「真に幸いなのは神の言葉を聞いて、それを守る人だ」とイエスに従う人々へ称賛のニュアンスを込めて語られる。

⑨それとは反対に、宗教的権力者を非難する箇所では、ファリサイ派の人々に対しては、外側は潔めるが内側は貪欲と汚れで満ち (11:39, γέμειν ἁρπαγῆς καὶ πονηρίας)、十分の一は献げるが義と神の愛を蔑ろにし、会堂の上座に座り広場で挨拶されるのを好む、という悪徳を数え挙げて災いである (οὐαί)、と非難する。また、律法学者に対しては、人間に背負いきれない重荷を負わせ、先祖と同じように預言者の墓を建てるのは、災いである (οὐαί)、と非難する。また、預言者を迫害し殺害したという先祖からの悪徳を非難し、イエスを殺したことに対する非難が前もって暗示される。さらに、続くファリサイ派の人々のパン種への

警告では、これらの悪徳は「偽善」(12:1, *ὑπόκρισις*) である、と一言で要約される。

⑩また、安息日に腰の曲がった女性を癒す奇跡物語では、女性は癒されると神を讃える (13:13, *δοξάζειν τὸν θεόν*)。しかし、会堂長がイエスを批判すると、イエスはそれに対して「偽善者達よ！」(13:15, *Ὑποκριταί*) と非難し、彼らを批判する疑問を投げかけるが、彼らは恥じ入り、群衆はイエスによってなされた素晴らしい出来事 (13:17, *ἐνδόξα*) でイエスを称賛して喜ぶ。

⑪律法と神の国の下りでは、ファリサイ派の人々は「金に執着する」(16:14, *φιλάργυροι*) という悪徳で叙述される。すなわち、宗教的権力者が「富んでいる者」また「力ある者」であることの具体的な一面が活写される。また、ファリサイ派の人々は人間の前で「自分を義とする人」(16:15, *οἱ δικαιοῦντες ἑαυτούς*) と表現される。それは「神を義とする」(Lk.7:9) 民や徴税人とは対照的に描かれており、「自分を義とする偽善」(20:20, cf.12:1) であり、それは悪徳と考えられている。すなわち、外面的な人間の義と内面的な神の義が対比され、外面的な義を問題にする人に対して非難のニュアンスが込められており、反対に内面的な義を問題にする人に対して称賛のニュアンスが込められているのである。

⑫また、ファリサイ派の人と徴税人の譬話の導入の部分では、ファリサイ派の人は自分を「正しいとし、他の人々を蔑視する」(18:9, *δίκαιοι καὶ ἐξουθενοῦντες τοὺς λοιπούς*) 人として、非難される。また、この譬話の最後は、「自分を高くするものは低くされ、低くするものは高くされる」(18:14) という立場の逆転の言葉で結ばれており、ファリサイ派の人々への非難は、具体的には傲慢という悪徳への非難となっている。

⑬エルサレムに向かう旅行の終わり近くにイエスの最後の奇跡である盲人の癒しの記事が記されている。イエスの先頭にいる人々が盲人を黙らせようとすると、盲人はそれを阻止して、「ダビデの子よ哀れみたまえ」と叫び続けたので、イエスが目を癒して見えるようにする。すると、盲人は神を讃えて (18:42, *δοξάζειν τὸν θεόν*) イエスに従い、これを見た民全体も神に讃辞を献げる (18:43, *διδόναι αἶνον τῷ θεῷ*)。この記事はマルコ版に従っているが、最後の癒された人と民が神を称賛するモティーフは、マルコにはないルカの追加である。このことからもルカが奇跡物語を、神とイエスを称賛するトポスに置き、称賛と非難の叙述の重要な要素としていることがわかる。これは奇跡物語が連続して後にマルコ版

に追加された称賛のモティーフ（5:26）や、ナインのやもめの息子の蘇生物語やサマリア旅行中の腰の曲がった女性の癒しの物語というマルコ版にはない奇跡物語に称賛のモティーフが見られることからも明らかである。

⑭エルサレムの部の冒頭に置かれたエルサレム入城の場面で、弟子達の一行は、彼らが見た数々の力ある業について大声で神を讃え（19:37, αἰνεῖν τὸν θεόν）喜んで次のように言う。「来るべき方は誉め讃えられよ。主の御名によって来るべき王は。天には平和、いと高きところには栄光あれ。」すると、ファリサイ派のある人々がこれを阻止しようとすると、イエスは、彼らを黙らせれば石が叫ぶ、と答える。ここでは、まず最初に数々の奇跡の故に神が称賛され、続いて、「主の御名によって来るべき方」（cf.13:35）であるイエスが称賛の対象になっている。そして、それは天使の讃歌グロリア・インエクセルシス・デオを捩った形の讃辞で語られ、いと高き神に栄光を帰すためであることが述べられる。また、マルコ版にはない描写であるが、それを阻止しようとする宗教的権力者が対照的に描かれて、イエスの厳しい言葉で非難される。

⑮受難物語に入ると、それまで宗教的権力者として登場してきたファリサイ派の人々と律法学者の中で、律法学者は変わらないが、ファリサイ派の人々の代わりに長老と祭司長が登場する。しかし、彼らが「自分を義と認めて偽る」（20:20）という非難すべき悪徳で叙述されることには変わりはない。律法学者は先祖とともに預言者を迫害し殺害する、と先に非難されたが（11:47—51, οὐαί）、受難予告（9:22）では、彼らとともに長老、祭司長が挙げられ、サンヘドリン議会を構成するこれらの三者がイエスの殺害を企て（19:47, 20:19, 22:3, cf.22:4）、それを実行する（22:66）。ここには、預言者殺害やイエス殺害に関して宗教的権力者に対して先になされた非難のトーンが引き続き見られる。その中でも非難されているのは律法学者である（20:45—47）。

⑯ルカの描く十字架上のイエスの言葉は、マルコ版の「我が神、我が神、何故私をお見捨てになったのですか」（Mk.15:34）という詩扁22扁2節の言葉が消えて、「我が霊を御手に委ねます」（Lk.23:46）という詩扁31扁6節の言葉に置き換えられる。それと呼応して、それを見ていた百人隊長の言葉もマルコ版の「まことにこの人は神の子であった」（Mk.15:39）という表現から、「まことにこの人は正しい（δίκαιος）人であった」（Lk.23:48）に変えられて義が強調され、百人隊長が神を賛美する（δοξάζειν τὸν θεόν）モティーフが書き加えられる。

⑰十字架・復活の後に、ルカ福音書は昇天物語で終わるが、その描写は最初の誕生物語と比べて極めて簡潔であるが、ここも最初と同じように短いながらも称賛のモティーフが多く見られる。イエスは昇天する直前に手を挙げて弟子達を祝福し（24:50，εὐλογεῖν）、祝福している時に（22:51，εὐλογεῖν）昇天する。また、エルサレムに帰った弟子達は大きな喜びに溢れ、神殿で神を称賛するのである（24:53，εὐλογεῖν τὸν θεόν）。

（ii）使徒言行録における称賛と非難のモティーフ

①冒頭のマッテヤの選出の記事の中で、ユダの死について言及される。ユダの裏切りはルカ福音書では、「サタンが入った」（Lk.22:3）と叙述され、彼らはユダに「金を渡した」と述べられ、「人の子を裏切る者は災いだ」（22:22，οὐαί）と非難される。使徒言行録では、その死はマタイ福音書とは異なり、自殺ではなく、神の懲罰を意味する不自然な墜落死として表現される。その理由として「不正な報酬から」（Acts 1:18，ἐκ μισθοῦ τῆς ἀδικίας）土地を得た、と非難される。それは「金に執着する」ファリサイ派の人々に代表される富んでいる人への非難のトーンとも一致する。

②ルカ福音書のイエスの宣教開始の説教と同じように、使徒言行録の全体のテーマを象徴的に示すペンテコステの出来事は、ペトロをはじめ使徒達全員が聖霊に満たされ（2:4，πιμπλάναι πνεύματος ἁγίου）、天下のあらゆる種族の敬虔な人々が（2:5，ἄνδρες εὐλαβεῖς）、それぞれの言語で「神の偉大な業を語る」（2:11，λαλεῖν τὰ μεγαλεῖα τοῦ θεοῦ）驚くべき称賛の出来事として叙述される。

③ペトロの説教を受け入れた人々が描写された後に、信者の理想的な姿が描かれている。そこでは、彼らが所有物を一切共有にし、心を一つにし、神殿で神を礼拝して、家々でパンを割いて食事を共にすると同時に、「神を讃えて」（2:47，αἰνεῖν τὸν θεόν）いたことが叙述される。また、それが民全体からも好意をもたれていた（2:47，ἔχειν χάριν）と称賛のトーンで描かれる。

④美しの門のところでペトロは「金銀はない」と言ってイエスの名で足の萎えた人を癒すが、彼は躍り上がって歩きだし、「神を讃える」（3:8，9，αἰνεῖν τὸν θεόν）。そして、それを見ていた民は驚愕と畏敬の念に満ち溢れる（3:10，πιμπλάναι θάμβους καὶ ἐκστάσεως）。すなわち、ルカ福音書5章26節と同じように驚くべき神の業を通して癒されたた人が神を称賛するモティーフから民が畏れるティーフへと移行していく。

⑤その直後に再びペトロが説教し、今度はペトロの説教を受け入れない祭司長や長老らの宗教的権力者が、神を讃える（4:21，*δοξάζειν τὸν θεόν*）民と対比的に描かれるが、ペトロは聖霊に満たされて（4:8，*πιμπλάναι πνεύματος ἁγίου*）語り、遂にはこれらの人々に向かって「神に聞き従うことよりもあなたがたに聞き従うことが正しいのか」と判断を迫る。ここには、ルカ文書全体の背後に貫いているモティーフ、すなわち神に従うことを「正しい」こととして称賛し、自分を義とする人間に従うことを「正しくない」とする非難のトーンが見られる。

⑥「聖霊と信仰に満ちた立派な人」（11:24，*ἀγαθὸς καὶ πλήρης πνεύματος ἁγίου καὶ πίστεως*）と称賛されるバルナバとは対照的に、アナニアとサッピラは、バルナバと同じように土地を売って使徒達の足元に置いたのであるが、その代金の一部を手元に置いて虚偽の報告をしたために、神の懲罰を受けて、即座に息が絶える。ここでも、ユダの裏切りと同じようにサタンについて言及され、「サタンがあなたの心に満ち溢れ」（5:3）と叙述される。すなわち、外面的にはバルナバと同じような賞賛すべき行為のように見えるがその内面的動機が問われているのである。そして、金銭を誤魔化すことが「偽ること」（5:3，*ψευσάσθαι*）であり、聖霊を偽る罪（cf.Lk.12:20）であると厳しく非難されている。

⑦他方、模範的な信者達の生活を描く場面では、彼らはソロモンの廊のところに集まり、残りの人々は誰もあえて彼らに加わろうとはしなかったが、民は彼らを讃えていた（5:13，*μεγαλυνεῖν*）、と使徒達が周囲の人々から称賛されていたことが描かれる。

⑧ペトロを中心とする使徒達とエルサレムの宗教的権力者との対立が深まり、葛藤が高まってくる場面で、祭司長とその仲間ならびにサドカイ派の人々は、「嫉妬心に満たされ」（5:17，*πιμπλάναι ζηλοῦ*）という非難すべき悪徳で叙述される。また、彼らはペトロら使徒達に「手をかけ」（5:18，*ἐπιβάλλειν τὰς χεῖρας*，cf.4:3，12:1，21:27）獄にいれ、ついには彼らを殺そうとする（5:33，*ἀναιρεῖν*，cf.9:23，24，29，25:3）。これはイエス逮捕と殺害を企てた宗教的権力者の叙述と同じ表現である（Lk.20:19；22:2）。

⑨ヘレニスト・グループの7人が選出される場面では、それぞれが「聖霊と知恵に満ちた評判のよい人」（6:3，*ἄνδρες μαρτυρουμένοι πλήρης πνεύματος ἁγίου*）であり、そのリーダー格のステファノは「信仰と聖霊に満ちた人」（6:5，*ἀνὴρ πλήρης πίστεως καὶ πνεύματος ἁγίου*）かつ「敬虔な人」（8:2，*ἀνὴρ εὐλαβεῖς*）と称賛すべき徳によって叙述される。そ

れとは対照的に、ステファノの演説が終わった後で、その言葉を拒んだ人々は「心が煮え返るほど怒り、歯ぎしりをする」(7:54, cf.Lk.13:28)と怒りという非難すべき悪徳によって叙述される。

⑩「偉大な神の力」と呼ばれていたサマリアの魔術師シモンは、使徒達の手から聖霊が下るのを見て、それを金銭で買おうとする。すると、ペトロから「あなたの心は神の前で真っ直ぐでない」(8:21)とその内面的動機が鋭く批判され、「悪事」(8:22, *κακία*)と「不正」(8:23, *ἀδικία*)という悪徳が非難される。ここでは、謙遜と反対な傲慢な心と清貧と反対な金銭によって使徒の権利を買い取ろうとする心に対して、二重の非難がなされる。

⑪パウロの回心物語で、パウロはステファノの殺害の後に大祭司からの許可状を携えて、「脅しと殺害の息を弾ませ」(9:1, *ἐμπνεῖν ἀπειλῆς καὶ φόνου*) ダマスコの弟子達を捕らえようとするが、復活したイエスの幻を見ると、神の懲罰として目が見えなくなる。このような悪徳の叙述とそれに対する懲罰とは対照的に、パウロに使命を示し、その目を癒して見えるようにするダマスコの弟子アナニアは敬虔な人(22:12, *ἀνὴρ εὐλαβεῖς*)として称賛すべき徳によって叙述される。

⑫ステファノの殺害の後に、ペトロはユダヤ地方を巡回し、ルダでは中風のアイネアの癒し、ヨッパではタビタまたの名をドルカスの蘇生という男女の対の奇跡物語が語られる。ここでは、奇跡の対象が民衆や群衆ではなく、迫害下の弟子であるキリスト教徒となっているが、それぞれ「聖なる者」(9:32, *ἅγιος*)、「善行と慈善の心に満ちて」(9:36, *πλήρης ἔργων ἀγαθῶν καὶ ἐλεημοσυνῶν*, cf.9:39)と称賛されるべき徳が叙述される。すなわち、ペトロは自分の力や敬虔によってではなく(cf.3:12)イエスの御名によって(9:34)それぞれイエスと平行する奇跡を行うが(cf.Lk.5:17—26; 7:11—17, 8:41—42, 49—56)、奇跡によって神を称賛したり、それを行うイエスを称賛するのではなく、ここでは奇跡の対象となっている信者の行為が称賛される。

⑬コルネリオの回心物語で、コルネリオは異邦人であったが、「敬虔で、神を畏れ」「多くの慈善を行い」(10:2, *εὐσεβὴς καὶ φοβούμενος τὸν θεὸν... ποιεῖν ἐλεημοσύνας πολλάς*, cf.10:33)また「正しい人」(10:22, *ἀνὴρ δίκαιος*)で、ユダヤ人からも称賛されていた(10:22, *μαρτυρεῖσθαι*)ことが述べられる。すなわち、敬虔でかつ義(10:35, *δικαιοσύνη*, cf.10:33)を行う人であることが度々強調される。コルネリオらが回心すると、ペンテコステの時と同じように聖霊が下って、彼ら

は異言を語り神を讃える（10:46，*μεγαλύνειν τὸν θεόν*）。さらに、これらの報告を聞いた人々も、異邦人の回心の出来事を聞いて神を讃える（11:18，*δοξάζειν τὸν θεόν*）。ここに回心やそれを聞いた人々の神への称賛とともに回心した異邦人の称賛すべき徳が強調されて描かれる。

⑭ヘロデ王がヨハネの兄弟ヤコブを殺害する下りでは、ヘロデ王が「悪事をする」（12:1，*κακῶσαι*）とまず最初に非難すべき悪徳で叙述される。その後、ペトロの逮捕と奇跡的な解放が語られ、再びヘロデ王の話に戻るが、民衆は、怒る（12:20，*θυμομαχεῖν*）ヘロデ王に対して、人間の声ではなく神の声だと叫び、神に栄光を帰さなかったので、神の懲罰として息が絶えた、と描かれる。ここでは、殺害、怒り、傲慢という非難すべき悪徳に対して神の懲罰が下ることが鮮やかに描かれる。ヨセフスによるヘロデ・アグリッパ1世の死の叙述と比較すると（『古代誌』19.8.2)、ルカ文書ではヨセフスに見られるヘロデ王の敬虔さを表す言葉がなく、また梟が現れ不吉な印と理解して苦しんで死ぬのではなく、直接的に神の使いが現れて息を絶えさせる叙述により、悪徳に対する非難のモティーフがより一層明確にされている。

⑮パウロの所謂第1次宣教旅行でのパフォスの叙述の中で、パウロはユダヤ人の魔術師で偽預言者のバルイエスまたの名をエリュマという人物に宣教を邪魔される。パウロは聖霊に満たされて、面と向かって「あらゆる偽りとあらゆる邪悪に満ち、悪魔の子、すべての義の敵」（13:10，*ὦ πλήρης παντὸς δόλου καὶ πάσης ῥᾳδιουργίας, υἱὲ διαβόλου, ἐχθρὲ πάσης δικαιοσύνης*）と非難する。すると、その非難の言葉の力が現され、神の懲罰が下り、目が見えなくなる。

⑯ピシディアのアンティオキアでは、パウロの演説が終わり、次の安息日に、ユダヤ人は集まってきた群衆を見て「嫉妬心に満たされ」（13:45，*πιμπλάναι ζηλοῦ*）、パウロが語ったことに反対して述べ、冒瀆する。それとは逆に、パウロがユダヤ人世界から異邦人世界に向かうことを宣言すると、それを聞いた異邦人は喜んで、主の言葉を讃える（13:48，*δοξάζειν τὸν λόγον τοῦ κυριοῦ*）。ここでは神の言葉を拒むユダヤ人とそれを受け入れる異邦人に対する非難と称賛が描かれているが、称賛の対象になっているのは、異邦人宣教を述べた神の言葉である。

⑰第2次宣教旅行の描写では、パウロは途中で宣教旅行をやめたヨハネ・マルコの代わりに、リュステラとイコニオンの信者の間で「評判のよい」（16:2，*μαρτυρεῖσθαι*）テモテを同伴させる。ここでは、弟子達の間で称賛されている者がパウロの同行者として選ばれる。

⑱第３次宣教旅行では、パウロの手による癒しや悪霊祓いが叙述されるが（19:11—12)、それとは対照的に、スケワの７人の子らはパウロが宣教していたイエスの名を勝手に用いて悪霊祓を行おうとすると、逆に悪霊に非難されて罰を受ける（19:15—16)。このことを知ったエフェソのユダヤ人も異邦人も畏れの念に打たれ、イエスの御名を称賛する(19:17，*μεγαλυνεῖν*)。ここで称賛されているのは、イエスの存在と同等なイエスの御名である。

⑲宣教旅行を終えて、エルサレムにやってきたパウロは、主の兄弟ヤコブやエルサレムの長老達に、パウロの宣教によって各地で異邦人が神の言葉を受け入れたことを報告すると彼らは神を讃える（21:20，*δοξάζειν τὸν θεόν*)。このように、パウロの宣教の終わりにおいても、イエスの宣教の始めと同じように、称賛のモティーフで締め括られる。

⑳その後のエルサレムでのパウロの逮捕、裁判、弁明の場面は、イエスの逮捕、尋問、裁判の場面と同じように、宗教的権力者はパウロに手を掛けて（Acts 21:17，cf.Lk.20:19）逮捕し、互いに協議し（Acts 22:30，cf.Lk.22:4，66)、ユダヤ人とともにパウロを殺そうとするが(Acts 21:31，23:12，14，*ἀποκτεινεῖν*，cf.Lk.9:22，13:31，34，18:33;Acts 22:10，23:15，21，27，25:3，26:10，*ἀναιρεῖν*，cf.Lk.22:2)、ここには強い非難の調子が含まれている。また、ルカ福音書が昇天の場面の称賛のモティーフで終わっているのに対して、使徒言行録はイザヤ書６章９—10節を引用して、福音を拒むユダヤ人に対する警告と非難のモティーフで終わっている（28:26—27)。

４．おわりに

以上のように、ルカ文書には、他の福音書と違って、称賛と非難のモティーフが一貫して夥しく見られ、しばしば称賛と非難が一つのエピソードの中で、あるいは隣接するエピソードの間で対照的に描かれるのである。演示弁論の典型である葬礼演説では、ポリスを築いた先祖（*πατερές*）やその伝統を守るために敵と戦って亡くなった戦士達が第一義的に称賛の対象になり、その他ポリスを支配する理念や教育、またポリスそのものが付随的に称賛の対象になっている。それと比較すると、ルカ文書で称賛の対象になっているのは、第一義的に神であり、さらに教えや奇跡などの行為を通して神を明らかにしたイエスや、それを受け継いでイエスの十字架や復活を語り、イエスの御名によって奇跡を行うペトロやパウロ、さらにこれらの周辺の敬虔な弟子たちも称賛の対象に

なっている。敵対する人々が非難の対象になっているのは葬礼演説もルカ文書も共通である。

葬礼演説で称賛される主な徳は先祖の「思慮深さ」(φρόνησις)「正義」(δικαιοσύνη)「節制」(σωφροσύνη) であり、とりわけ戦いで亡くなった戦士の「勇気」(ἀνδρεία) である。また、これらの徳目の反対の悪徳が非難される。これに対してルカ文書では、「敬虔」(εὐσέβεια)、「謙遜」(ταπεινοφροσύνη)、「貧しさ」(πτωχοτής) などが支配的な徳目であり、またその反対の「不敬虔」(ἀσέβεια)「傲慢」(ὕψωσις)「金銭への執着」(φιλάργυρια) は目立つ悪徳であるが、これらの徳や悪徳への言及は、リュシアスやデモステネースなどの葬礼演説などにも見られる。さらに「正義」と「不義」もルカ文書に見られるが、ルカ文書では外面的な義ではなく内面的な義が称賛され、神の前における内面的な義をおろそかにして、人間の前での外面的な義のみで体裁を繕うことが、「偽善」であると強く非難されている。ルカ文書には「勇気」という言葉やそれに関連する言葉は見られないが、敵に殺害されることを知りつつも、先祖の預言者に倣ってエルサレムでの殉教を覚悟したイエスとパウロの言葉に(Lk.13:33, 34, cf.9:51; Acts 21:13, cf.20:23, 24)、彼らの勇気を讃える意味が込められているのかもしれない。

もし以上述べたことが正しければ、葬礼演説の目的が、先祖の徳を想起し、それに倣って亡くなった戦士の勇気を讃え、現在に残された人々を慰め励ますとともに、これらの徳に倣うように促す教育 (παιδεία) にあり、その社会的機能はポリスという共同体の維持にあったように、ルカ文書で称賛と非難のモティーフが夥しく用いられているのは、ユダヤ教との対決の中でユダヤ教の遺産を受け継ぎ、ユダヤ人キリスト教から分かれた異邦人キリスト教の正統性を主張し弁護しつつも、とりわけ指導的な使徒達が亡くなった後に共同体が危機的な場面に遭遇した折りに、その基いとなったイエス、ペトロ、パウロの言葉と業とを想起し、神を讃えるとともにこれらの人々の徳を讃えてそれに倣うように促し、敵対者の悪徳を非難してそれに倣わないように警告し、残された人々を教育してエクレーシアという共同体を維持することにその目的があったと思われる。このような称賛と非難の叙述スタイルで書かれた歴史叙述は、名誉と恥が共同体に大きな影響を与えていたギリシア・ローマ社会でこそ、意味があったと思われる。(26)

註

＊本稿は、1997年９月16、17日に、東北学院大学で開かれた日本新約学会第37回学術大会で発表した「ルカ文書の修辞学的統一性」という論文の原稿の一部を書き改め、注を付けたものである。

（１） 山田耕太「使徒行伝のジャンル」『新約学研究』第20号，1992，2-17；K.Yamada，"A Rhetorical History: The Literary Genre of the Acts of the Apostles," S.E.Porter & Th.H.Olbricht (eds.), *Rhetoric, Scripture and Theology: Essays from the 1994 Pretoria Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996, 230-250.

（２） 山田耕太「ルカ福音書の序文と歴史叙述」『敬和学園大学研究紀要』第４号，1995，1-23；山田耕太「ルカ文書の序文と修辞学的歴史」『新約学研究』第22号，1994，53-54；K.Yamada，"The Preface to the Lukan Writings and Rhetorical Historiography," S.E.Porter & D.Stamps (eds.), *Rhetoric on Scriptures: Essays from the 1996 Malibu Conference* (tentative title), Sheffield: Sheffield Academic Press, forthcoming.

（３） 山田耕太「ルカ文書の物語的統一性」『敬和学園大学研究紀要』第６号，1997，1-23.

（４） 山田耕太「使徒行伝のジャンル」，13.

（５） Artistoteles, *Ars Rhetorica*, 1.3; 1.9; Cicero, *De Inventione*, 1.5.7; *Rhetorica ad Herennium*, 1.2.2; Quintilianus, *Institutio Oratoria*, 2.21.23; 3.3.14-15; 3.4.12-15.

（６） Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 1.3.

（７） Cicero, *De Inventione*, 2.59,176-178.

（８） Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 1.9.

（９） *Rhetorica ad Herennium*, 3.10-15.

(10) Y.L.Too, *The Rhetoric of Identity in Isocrates: Text, Power, Pedagogy*, Cambridge: Cambridge Univ.Press, 1995, 101, "After the archaic period *sôphrosunê* continues to be an important in the construction of civic identity, especially that of Athenian identity. Edith Hall ovserves that in tragic literature the four cardinal virtures (which she translates as 'wisdom' or 'intelligence', 'manliness' or 'courage', 'discipline' or 'restraint' and 'justice')stress the Greekness of the dramatic characters who possess them."

(11) Cicero, *De Inventione*, 2.176-178.

(12) Quintilianus, 3.7.

(13) 演示弁論に関しては、以下を参照。R.Vorkmann, *Die Rhetorik der Griechen und Römer in Systematischer Übersicht*, Leipzig: B.G.Teubner, 1885, 314-361; Th.C.Burgess, "Epideictic Literature," *University of Chicago Studies in Classical Philology* 3 (1902), 89-261 = *Epideictic*

Literature, New York: Garland, 1987 (reprt.); H.Rausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, (2.Aufl.), München: Max Hueber, 1974 (1960), vol.1, 129–138; R.C.Chase, "The Classical Conception of Epideictic," *Quarterly Journal of Speech* 47 (1961), 293–300; G. Kennedy, *The Art of Persuation in Greece*, Princeton: Princeton Univ. Press, 1963, 152–203; J.Martin, *Antike Rhetorik: Technik und Methode*; München: C.H.Beck, 1974, 177–210; C.Oravec, "'Observation' in Aristotle's Theory of Epideictic," *Philosophy and Rhetoric* 9 (1976), 162–174; W.H.Beale, "Rhetorical Performative Discourse: A New Theory of Epideictic," *Philosophy and Rhetoric* 11 (1978), 221–246. Cf.G.Kennedy, *A New History of Classical Rhetoric*, Princeton: Princeton Univ.Press, 1994, 61, "Modern rhetoricians usually prefer to think of epideictic rhetoric as a discourse in any literary genre that is not specifically deliberative or judicial and does not, therefore, urge specific action but serves to encourage belief, group solidarity, and acceptance of a system of values. Epideictic speech is thus of ideological importance."

(14) G.Kennedy, *Persuation*, 154–166. 1997年9月17日に日本新約学会第37回学術大会で、本稿の原稿を発表した際に、学会理事である東京大学の大貫隆氏より、イソクラテスの『エウアゴラス』も葬礼演説ではないか、という内容の質問を受けた。同様の見解は、大貫隆『福音書と伝記文学』岩波書店，1996年，105—106頁，「その業績と遺徳を顕彰する称賛文（enkomion）である。…実際にエウアゴラスの葬儀の場で読まれたものかはともかく、葬礼演説という形式で著されており、エピローグ（§73—89）はエウアゴラスの遺子ニコクレスへの呼びかけになっている。」参照。それに対してその場では、現在残されている葬礼演説の数が6である点は古典学者の定説によっていること、イソクラテスの演説等の分類に関しては学者によっていろいろ論じられてきたが、一般的に言ってどのようなジャンルに分類されても演示弁論の傾向が見られることを述べ、その具体的なジャンルについては即答を避けた。現時点では、確かにエウアゴラスの死に際して、エウアゴラスを称える内容の演説であり、葬礼演説と類似しているが、国家的行事としての葬儀や追悼式の際に述べられた葬礼演説ではなく、またその内容も祭典演説と類似した葬礼演説と多少異なり、共同体という視点が弱くなり、個人の徳を生まれや教育から業績に到るまで称賛して褒め称える顕徳演説に分類される、と筆者は考えている。すなわち、葬礼演説と顕徳演説（「称賛文」）のジャンルは別であると考えている。

(15) Thucydides, 2.35–46.

(16) Lysias, *Epitaphius*, 1–37.

(17) Plato, *Menexenus*, 236d–249c.

(18) Demosthenes, *Epitaphius*, 1–37.

(19) Cicero, *Epistulae ad Familiares*, 5.12.4.

(20) Dionysius Halicarnassensis, *Epistula ad Pompeium*, 6.

(21) Lucianus, *Quomodo Historia Conscribenda Sit*. 55.

(22) 修辞学的歴史に関して、註1、2で挙げた諸論文の註で言及されている文献に加えて、以下を参照。S.Rebenich, "Ch.9 Historical Prose," (ET by R.McL. Wilson) S.E.Porter (ed.),*Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330B.C.-A.D.400*, Leiden: Brill, 1997, 265-337; R.W.Cape,Jr, "Ch.13 Persuasive History," W.J.Dominik (ed.), *Roman Eloquence: Rhetoric in Society and Literature*, London/New York: Routledge, 1997, 212-228.

(23) ハリカルナッソスのディオニュシオスに関して、註1で挙げた論文の註で言及されている文献に加えて、次の論文はディオニュシオスの『ローマ古代誌』とルカ文書との歴史叙述の平行関係を見出して、ルカ文書が顕徳的な歴史叙述であると結論する。J.M.Lilley, *The Narrative Presentation of Ethical Paradigms in Dionysius's* Roman Antiquities *and Luke-Acts* (Ph.D.dis.Marquette Univ. 1994), Ann Abor: UMI Dissertation Services, 1995.

(24) キケロの修辞学的歴史の理論とそのサルスト、リヴィウス、タキトゥスら影響ないしは展開に関しては、とりわけ A.J.Woodman, *Rhetoric in Classical Historiography*, London: Croom Helm / Portland: Areopagitica Press, 1988. 尚、この下りは、修辞学的歴史叙述はサルスト、リヴィウス、タキトゥスらにも見られるのではないか、という趣旨の大貫隆氏の質問に対して口頭でお答えした線に沿って書き改めた。ご指摘に感謝したい。本稿2（3）「演示弁論と修辞学的歴史の叙述スタイル」に関して詳しくは、1998年1月19日に日本聖書学研究所で発表した拙稿「ヘレニズム・ローマ期の修辞学的歴史叙述理論—ルカ文書の歴史叙述の背景として」を参照。

(25) Cf., R.Tannehill, *The Narrative Unity of Luke-Acts*, vol.1 & vol.2, Philadelphia: Fortress, 1986 & 1990; J.K.Kingsbury, *Conflict in Luke: Jesus, Authorities, Disciples*, Minneapolis: Fortress, 1991; J.D.Kingsbury, "The Pharisees in Luke-Acts," F.van Segbroeck et al. (eds.), *The Four Gospels 1992: Festschrift Frans Neirynck*, Leuvan: Leuvan Univ.Press, 1992, vol.2, 1497-1521; J.A.Darr, *On Character Building*, Louisville: Westminster / John Knox Press, 1992.

(26) Cf.,B.J.Malina & J.H.Neyrey, "Honor and Shame in Luke-Acts: Pivotal Values of the Mediterranean World," J.H.Neyrey (ed.), *The Social World of Luke-Acts: Models for Interpretation*, Peabody: Hendrickson Pub.Co., 1991, 25-65.

Epideictic Style in the Lukan Writings

Kota Yamada

1. Prologue

Hellenistic and Roman historiography, on the one hand, has been recently acknowleged as rhetorical one in the field of classics. On the other hand, in the field of New Testament stuides, rhetorical criticism has been becoming dominant as the way to analyse not only the Epistles but also historiography these days. In this essay I will point out the influence of the epideictic style of the classical rhetoric in the Lukan writings.

2. Epideictic Speech and the Style of Rhetorical Historiography

(1) Epideictic Speech in the Rhetorical Handbooks

Epideictic speech is written in the style of praising virtues and blaming vices and delivered as an encomion, a panegryc or a funeral oration, which is formless unlike forensic and deliberative speeches (Aristoteles, *Rhetorica ad Herennium*, Cicero, Quintilianus).

(2) Funeral Orations as Typical Examples of Epideictic Speech

Epideictic speech covers verious areas and subjects, but funeral orations have traditional forms and expressions as typical examples of epideictic speech. According to Pericles' funeral oration in Thucydides' *History* Bk.2 and Lysias' funeral oration etc., the virtues of ancestors are at first praised, then the virtues of the dead following after those of the ancestors are praised, while the vices of the enemies are blamed, and the words of sorrow and consolation are mentioned in the end. The virtues praised in these funeral orations are judisiousness, righteousness, courage and prudence, which are the four Greek cardinal virtues. etc.

(3) Epideictic Speech and the Style of Rhetorical Historiography

The thought of Cicero, Dionysius of Halicarnassus and

Lucian are slightly different, who mention their rhetorical historiography in their works fragmentarily, but they similarly refer to the use of the epideictic style in the narrative part of rhetorical historiography. (For the more detailed discussion of this section (3), see my paper "Theories of Rhetorical Historiography in Hellenistic and Roman Periods—As the Background of the Lukan Historiography," which was read at the Japanese Biblical Institute on 19 January, 1998.)

3. The Style of Rhetorical Historiography in the Lukan Writings

In the nativity stories, which function as the introduction to the whole Lukan writings, many features of praising virtues and blaming vices are seen in the hymns of the Benedictus, the Magnificat, the Gloria and the Nunc Dimittis as well as in the narrative part. Similarly, in the narrative part of the main section of the Lukan writings, the motifs of praising the virtues and blaming the vices are seen in 17 sections of the Gospel and 20 sections of the Acts. In these sections God is mainly praised and Jesus is also praised, and there are some words to praise the apostles and disciples who followed him faithfully. On the other hand, the enemies of Jesus and apostles are blamed, but sometimes the unfaithful disciples are also blamed.

4. Epilogue

The virtues praised in the Lukan writings are piety, modesty and poorness etc. and vices blamed are impiety. arrogance and love of money etc. But these virtues are seen in the funeral orations of Lysias and Demosthenes, while the four Greek cardinal virtues are also traced in the Lukan writings. In this way, the Lukan writings are supposed to be written at the critical moment of the continuation of the Ecclesia with the loss of the leading apostles, created not only by the external situation confronted with the conflicts with Judaism but also by the internal situation with the appearance of the heretics, in order to praise Jesus and his followers and also to encourage and

educate the remaining people. If it is so, the Lukan writings written in such style have significant meanings in the Graeco-Roman society where honour and shame had the dominant values among the people.

(This paper was read at the 37th annual meeting of the Japanese Society for the New Testament Studies, which was held at Tohoku Gakuin University, Sendai, on 16 & 17 September, 1997.)